

学位論文審査の要旨

学位申請者	菊地 優美 比較社会文化学専攻2012年度生		論文題目	野溝七生子文学の研究
審査委員	主 査:	大塚 常樹 教授	インター ネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	戸谷 陽子 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	申 琪榮 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	谷口 幸代 准教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	藤川 玲満 講師		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学)			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Japanese Literature)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本論はこれまで本格的な研究がなかった、大正末期から太平洋戦争後まで作家として活動した野溝七生子について、通時的にそのテーマや方法を追究した論である。

第一部は「父と母との狭間にある(娘)」として、初期から中期の作品を分析した。第一章「山樞」論では、暴力的な父が支配する家父長的な家庭に抵抗しつつも、制度に服従する母への依存から抜け出せない主人公の閉塞性を指摘し、この課題が後の野溝の作品に受け継がれて行くことを指摘した。第二章「灰色の扉」論では、家父長制を内面化した女性の、抵抗と服従との苦悩が、二重身として表象されているとした。第三章「奈良の幻」論では、インターテキストとして反映される「アベラールとエロイズ」、語り手のフランス人男性と母親との関係を分析し、国境を越えた多くの女性たちの抵抗に繋がる物語とした。第四章「黄昏の花」論では、ヒンデミットの歌劇「聖女スザンナ」との関係を探り、女性の性的欲望の記述と、それを抑圧する家父長的支配の中にも性的欲望が内在することを描いた物語と位置づけた。第二部は「〈母〉への思慕から女性同士の共感の物語へ」と題し、女性による妹への語り、ないしは手紙というスタイルが多い野溝文学の構造の意味を考察しつつ、女性同士の共感へと変化していく野溝文学の様相を分析した。第一章第二章の「女獣心理」論では、母の規範に服従する娘と、逸脱する娘の二人に焦点をあてて、まず、語り手の男性「壘」が、男性同士の絆の中で、男性性回復のために語るという構造を明かにし、壘の語りによって相対化されていることを指摘した。さらに二人の娘の相違から、母への批判を獲得していく女性が描かれるようになったことを指摘した。第三章「沙子死す」論では、産む身体としての女性を巡る家の論理と、その抵抗、女性同士の連帯を読み込んだ。全体を通じて、野溝文学には、インターテキストや手紙、物語の作品化等を通じて、読むことと書くことが家父長制からの抵抗の方法として重視されていること、また女性同士の共感と連帯が目指されていること、同時にそれはリテラシーの高さが要求される故に、女性たちの分断をもたらす可能性があることを指摘した。

第1回の審査委員会は12月16日に行われた。論文の目的や意義、構成、文章、作品の分析など、全体として十分なレベルにあることが確認されたが、書くことや読むことによる女性の自立、という主旨を明確にすること、家父長制やインターテキスト、ドッペルゲンガーなどの定義の明確化、想定読者の明確化などが求められた。修正論文は1月末に提出され、第2回審査委員会はメール会議にて開催し、修正が細部に渡って行われたことを確認した。公开发表会は2月17日に行われ、論文の要点を手短かに発表し、質疑で出された質問に対しても誠実に回答した。最終審査会は公开发表会の直後に行われた。野溝七生子は未だ本格的な研究がなく、その評価も西欧文学に憧憬する少女を描いたコスモポリタニズム作家といった視点にとどまっている。しかし野溝文学には家父長的な父や兄からの体罰、圧力に反抗する娘たち、家父長制度下での結婚・出産への忌避や抵抗、が描かれており、今日的に見ればフェミニズム的な文学といっても良い。菊地氏は通時的に作品を分析してこの点を明らかにした。さらに女性の自立として、書くこと、読むことの意義が重視されていることを指摘した。菊地氏の論文は、野溝文学の本質を捉えていると思われ、従来の評価を大きく変える研究であることが確認された。作品分析は緻密で、作品中に引用される各種インターテキストへの理解も深く、結論も説得力がある。以上、本論文は非常に価値ある内容であり、博士号(人文科学)、Ph. D. in Japanese Literatureを授与するにふさわしいものと認定した。